

殺菌消毒薬(特殊絆創膏を含む)

製品群No. 54

ワークシートNo.34

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化			
			併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生 するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの						使用量に上 限があるもの	過量使用・誤 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ				
殺菌消毒成分	マーキュロクロム	「純生」マーキュロ液	本薬は水溶液中でHg <sup>2+</sup> イオンを解離している。皮膚、粘膜に塗布すると、このイオンが細菌のSH基を有する酵素と結合して、これを不活性化させることにより、消毒効果をあらわす。ぶどう球菌、連鎖球菌、肺炎球菌、淋菌などの細菌に対し静菌作用をあらわすが、細菌の芽胞(炭疽菌、破傷風菌など)に対する効果は期待出来ない。			ショック(0.1%未満)	頻度不明(腎障害、骨髄抑制)	頻度不明(過敏症)			本剤又は他の水銀製剤に対し過敏症の既往歴、胸帯ヘルニアの小児、粘膜面、口に触れる可能性のある部位(乳頭等)の消毒				外用にのみ使用すること。眼に入らないようにすること。使用量はできるだけ必要最少量にとどめること。深い創傷に使用する場合の希釈液としては、注射用水か滅菌水を用い、水道水や精製水を使用しない希釈する。水にアルカリ土金属、重金属、第二鉄塩、酸類、ヨウ素等が存在する場合、変化することがあるので注意。			長期間・広範囲に使用で水銀中毒を起すことあり	皮膚表面の一般消毒には、2%液を、創傷・潰瘍の殺菌・消毒には0.2~2%液を用いる。いずれも症状に応じて1日1~数回患部に適用する。	皮膚表面の一般消毒、創傷・潰瘍の殺菌・消毒
	ヨウ化カリウム	内服のみ																		

殺菌消毒薬(特殊絆創膏を含む)

製品群No. 54

ワークシートNo.34

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 薬用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	機能効果		
	詳細の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)		スイッチ化等に伴う使用環境の変化				
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ				
ヨウ素	カテックス軟膏0.9%	本剤は、ヨウ素による殺菌作用並びにカテキソマーが有する滲出液等の吸収効果により潰瘍治癒促進効果を示す。					0.1~1%未満(疼痛、刺激感、皮膚炎(発赤、水泡、発赤など)、そう痒)、新生児に他のヨウ素系製剤を使用し、甲状腺機能低下症を起こしたとの報告、腫内に他のヨウ素系製剤を使用し、血中無機ヨウ素値及び血中総ヨウ素値が上昇したとの報告、本剤はヨウ素含有製剤であるので、多量投与及び長期連用時には甲状腺機能の変動に注意する				ヨウ素過敏症	甲状腺機能に異常、重症の熱傷、腎不全、新生児、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人及び授乳中の婦人(長期・広範囲)			外用のみに使用し、経口投与しない。眼科用には使用しない		妊婦又は妊娠している可能性のある婦人及び授乳中の婦人には長期にわたる広範囲の使用を避ける		潰瘍面を清拭後、通常1日1回、患部に約3mmの厚さに塗布する。(直径4cmあたり3gを目安に塗布する。) 滲出液の量が多い場合は、1日2回投与する。	褥瘡、皮膚潰瘍(熱傷潰瘍、下腿潰瘍)
ヨウ素	プレボダインソリューション 有効ヨウ素 1g/100mL	使用濃度において、栄養型細菌(グラム陰性菌)、結核菌、真菌、一部のウイルスに有効である。細菌、真菌に対する殺菌効果、結核菌に対する効果が認められる。				アナフィラキシー様症状(0.1%未満)	0.1%未満(0.1%未満)過敏症				妊婦中及び授乳中の婦人への長期にわたる広範囲の投与	本剤またはヨウ素に対し過敏症の既往歴、甲状腺機能に異常、重症の熱傷、新生児、腫内投与、妊婦の腫内長期投与(新生児に一過性の甲状腺機能低下)			眼に入らないよう注意。外用のみに使用する		妊婦中及び授乳中の婦人への長期にわたる広範囲の投与で先天性甲状腺機能低下症の乳児、海液の大量かつ長時間の接触によって皮膚変色、接触皮膚炎		1.本剤を塗布する。2.本剤を患部に塗布する。	1.手術部位(手術野)の皮膚の消毒、手術部位(手術野)の粘膜の消毒 2.皮膚・粘膜の創傷部位の消毒、熱傷皮膚面の消毒
組織修復成分	アラントイン	配合剤のみ																		

殺菌消毒薬(特殊絆創膏を含む)

製品群No. 54

ワークシートNo.34

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	I 用法用量	J 効能効果
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				
評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ	スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの											
局所麻酔成分	塩酸ソブカイン ヘルカミン注、表面麻酔類似と考へ使用			振戦、痙攣等の中毒症状(頻度不明)	ショック(頻度不明)	頻度不明(眼瞼、不安、興奮、霧視、眩暈、悪心・嘔吐等)	頻度不明(過敏症)		本剤に対し過敏症の既往歴	本人又は両親、兄弟に気管支喘息、発疹、蕁麻疹等のアレルギー反応を起こしやすい体質。高齢者。妊婦又は妊娠している可能性のある婦人。							使用に際し、目的温度の水性注射液または水性液として使用する。適宜増減する。仙骨麻酔:0.05~0.1%注射液にエピネフリンを添加したものをを用い、通常成人10~30mgを使用する。伝達麻酔(基準最高用量:1回40mg):0.05~0.1%注射液にエピネフリンを添加したものをを用い、通常成人3~40mgを使用する。浸潤麻酔(基準最高用量:1回40mg):0.05~0.1%注射液にエピネフリンを添加したものをを用い、通常成人1~40mgを使用する。表面麻酔:耳鼻咽喉科領域の粘膜麻酔には、1~2%液にエピネフリンを添加したものをを用い、伝達麻酔・浸潤麻酔には通常成人1~2mg	仙骨麻酔、伝達麻酔、浸潤麻酔、表面麻酔、歯科領域における伝達麻酔・浸潤麻酔

殺菌消毒薬(特殊絆創膏を含む)

製品群No. 54

ワークシートNo.34

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果		
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状を判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化				
			併用禁忌(他 剤との併用により 重大な問題が 発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの						使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用によ る健康被害 のおそれ					
局所麻酔成分	リドカイン	キシロカイン液「4%」、塩酸リドカイン表面麻酔に類似のため使用					意識障害、振戦、痙攣(頻度不明)	ショック(頻度不明)	頻度不明(眠気、不安、興奮、霧視、眩暈、悪心・嘔吐)	頻度不明(過敏症)			本剤の成分又はアミド型局所麻酔薬に対する過敏症の既往歴。	高齢者又は全身状態が不良。心刺激伝導障害。重症の肝機能障害又は腎機能障害。幼児。妊婦又は妊娠している可能性のある婦人。					過量投与で中毒症状が現れる。症状として中枢神経系(不安、興奮、意識消失、全身痙攣など)、心血管系(血圧低下、徐脈、循環虚脱など)が現れる。 眼科(点眼)用として使用しないこと。注射用として使用しない。	塩酸リドカインとして、通常成人では80~200mg(2~5mL)を使用する。なお、年齢、麻酔領域、部位、組織、体質により適宜増減する。  幼児(特に3歳以下)では低用量から投与を開始。	表面麻酔
血管収縮成分	塩酸ナファゾリン	0.05%プリピナ液「チバ」、塩酸ナファゾリンの配合剤しかなかったため、硝酸ナファゾリンの点鼻薬を用いた					MAO阻害薬(急激な血圧上昇)		頻度不明(眠気等の鎮静作用(特に小児)、神経過敏、頭痛、めまい、不眠症、血圧上昇、悪心・嘔吐、熱感、刺激感、乾燥感、嗅覚消失、反応性充血、長期投与で顆粒球減少・反応性の低下)	頻度不明(過敏症)			本剤の成分に対し過敏症の既往歴、2歳未満の乳・幼児(ショック)、MAO阻害剤の投与を受けている(急激な血圧上昇)	冠動脈疾患、高血圧症、甲状腺機能亢進症、糖尿病、交感神経作用薬による不眠・めまいなどの既往、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、小児	連用又は頻回使用により反応性の低下や局所粘膜の二次充ち血を起こすことであるので、急性充血期に限り使用するか又は適切な休薬期間を置いて使用すること。				眼科用として使用しないこと。過量投与により、主な全身作用として、血圧上昇と二次作用として臓器虚血がみられる。幼・小児では過量投与により、顕著な鎮静があらわれ、発汗、徐脈、昏睡等の全身症状があらわれやすい。連用・頻回投与により顆粒球減少、反応性の低下、局所粘膜の二次充ち血を起こすことがある。	通常、成人鼻腔内には、1回2~4滴を1日数回、咽頭・喉頭には1回1~2mLを1日数回塗布又は噴霧する。なお、年齢、症状により適宜増減する。局所麻酔剤への添加には、局所麻酔剤1mLあたり0.05%液2~4滴の割合で添加する。	上気道の諸疾患の充血・うっ血、上気道粘膜の表面麻酔時における局所麻酔剤の効力持続時間の延長

殺菌消毒薬(特殊絆創膏を含む)

製品群No. 54

ワークシートNo.34

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるおそれ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化
			併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ			
抗ヒスタミン成分	α-マレイン酸クロルフェニラミン	ホララミン錠 2mg、外用 がないため 経口剤を使用	抗ヒスタミン 作用		中枢神経抑制剤・アルコール・MAO阻害剤・抗コリン作用を有する薬剤(相互に作用を増強)、ドロキシドパ、ノルエピネフリン(血圧の異常上昇)	痙攣・錯乱・再生不良性貧血・無顆粒球症(頻度不明)	ショック(頻度不明)	5%以上又は頻度不明(鎮静、神経過敏、頭痛、焦燥感、複視、眩暈、不眠、めまい、耳鳴、前庭障害、多幸症、情緒不安、ヒステリー、振戦、神経炎、協調異常、感覚異常、霧視、口渇、胸やけ、食欲不振、悪心、嘔吐、腹痛、便秘、下痢、頻尿、排尿困難、尿閉等低血圧、心悸亢進、頻脈、期外収縮、鼻及び気道の乾燥、気管分泌液の粘性化、喘鳴、鼻閉、溶血性貧血、肝機能障害(AST(GOT)・ALT(GPT)・ALPの上昇等)、悪寒、発汗異常、疲労感、胸痛、月経異常、0.1%未満(血小板減少)、眠気を催すことがあるので自動車の運転等危険を伴う機械の操作			本剤の成分又は類似化合物に対し過敏症の既往歴、緑内障(緑内障の増悪)、前立腺肥大等下部尿路に閉塞性疾患(症状の増悪)、低出生体重児・新生児(痙攣等の重篤な反応があらわれるおそれ)	眼内圧亢進、甲状腺機能亢進症、狭窄性消化性潰瘍、幽門十二指腸通過障害、循環器系疾患、高血圧症、高齢者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人					α-マレイン酸クロルフェニラミンとして、通常、成人には1回2mgを1日1~4回経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	じん麻疹、血管運動性浮腫、枯草熱、皮膚疾患に伴うそう痒(湿疹・皮膚炎、皮膚そう痒症、薬疹)、アレルギー性鼻炎、血管運動性鼻炎、感冒等上気道炎に伴うしゃみ・鼻汁・咳嗽。